

GLOBAL VOYAGE

[グローバル ヴォヤージュ]

PEACE BOAT

2023

Summer

唯一無二の地へ

「水先案内人」阪根博さんが誘う

第二特集

パシフィック・ワールド号で
心満たされる世界一周を

[発行] (株)ジャパングレイス

唯一無二の地へ

「水先案内人」阪根博さんが誘う

ピースポートクルーズの南半球を巡る航路における南米の訪問地で、人気が高いのはマチュピチュとイースター島である。訪れたことがある人にとっては「もう一度行きたい」と願う場所であり、まだ訪ねたことがない人にとっては「ぜひ一度行ってみたい」と想像をふくらませる場所である。数ある世界遺産のなかで、人間の営みの神秘を感じさせ、心の奥底に圧倒的な余韻を残す、まさに唯一無二の地。今号ではペルー、リマ在住で長年にわたりペルー文化の研究を続け、南米の遺跡についても詳しい水先案内人の阪根博さんにマチュピチュとイースター島について語ってもらった。



日本マチュピチュ協会理事

阪根 博 SAKANE Hiroshi

リマにある「天野博物館(祖父の故・天野芳太郎氏が設立)」の事務局長を務め、ペルー文化の研究・土器・織物の収集・研究で広く考古学界に知られている。特にチャンカイ文化に造詣が深く、発掘作業にも携わりこの分野で多大な功績を残している。近年は新大陸最古(約4800年前)の神殿「ラス・シクラス遺跡」を発見し各メディアに大きく取り上げられ世界的な注目を浴びる。この模様は人気テレビ番組「世界ふしぎ発見!」で「緊急レポート ペルー謎の遺跡シクラス アメリカ大陸最古の文明を追え!」として大々的に紹介された。

Machu Picchu/Easter Island



GLOBAL VOYAGE 2023 Summer

CONTENTS

特集

[水先案内人] 阪根博さんが誘う
唯一無二の地へ P3

アンデス文明の聖域

[マチュピチュ] P4

絶海の孤島の謎

[イースター島] P6

帝国が育んだペルーの美食 P8

第二特集

パシフィック・ワールド号で
心満たされる世界一周を P10

[観賞]

映画やショーを楽しみ
イベントに参加する P12

[楽しむ]

新しい趣味を見つけたり
新しい習慣を身につけたり P13

[グルメ]

食を満喫する場所も種類も
いっそう充実 P14

[寛ぎ]

思い思いの
ひとときを過ごす P15

[海景]

洋上から感じる
自然の魅力と美しさ P16

ピースポートスタッフ紹介 P18



表紙の写真
クルーズ屈指の人気スポット「マチュピチュ」と「イースター島」。もとの言わぬ遺跡が、見る者の想像力をかきたて、時を超えて胸に迫る。

アンデス文明の聖域「マチュ・ピチュ」

アンデスの深い山々を分け入った先にあるマチュ・ピチュは、アンデス文明の最後の時代の遺跡です。豊かな自然と人間が築いた文明が完璧な調和をなし、奇跡的な場所であり、その姿は空からしか確認できない「空中都市」です。これぞ唯一無二の遺跡だと思います。

マチュ・ピチュの石像、石彫はアンデス文明の粹を集めた精緻の極みです。位置的なことを言うと、マチュ・ピチュはインカ文明圏からはアマゾンに寄ったところにあります。インカはクスコを4つの地方に分けて都市設計をし、それぞれに城塞都市をつくり、攻め入られたときの防衛拠点としました。私は、マ

チュ・ピチュは当初、アマゾンからあがつてくる蛮族に対する砦としての役割があつたのではないかと思っています。

ただし攻められることがなかつた過程で防衛の意味が薄れ、パワースポットであつたため祈りの場所、神殿都市、聖地へと変わつていった。この聖域としての説を私も支持しています。

神殿や祭壇の痕跡が多く残つているの

もそのためでしよう。住んだのは神官も含めて選ばれた人々であつたはずですが、マチュ・ピチュは神社でいうと奥の院、普通の人は行けないし、長い歳月その場所が口外されることもなかつたと考えられます。これは1532年にインカ帝国がスペイン人に滅ぼされたときも、マチュ・ピチュの存在が表に出なかつたことが証明しています。そのため約400年後にアメリカ人のハイラム・ビンガムによって発見されたとき、草に覆われた手つかずの遺跡として残つていたのです。



上空から見るとマチュ・ピチュが整然と計画されて建設されたことがわかる。



石造物の窓から見た、精巧に石を組み立ててつくられた建造物。



1



2



2



4



4

1:40段にもおよぶ「段々畑」ではさまざまな作物を栽培していた。
2:マチュ・ピチュには水路が流れ、山の水を貯めた「水汲み場」があった。
3:一番高い場所にあるパワースポット「インティワタナ」。
4:太陽信仰の盛んなインカにおいて重要な「太陽の神殿」。
5:精緻な石造りの建物が並ぶ遺跡内部。

インカ帝国滅亡後、マチュ・ピチュの人々の行方は知れず、遺跡発掘時には財宝の類いも残つていなかつたらしいですが、数ある謎は、文字をもたなかつた文明のため永遠に解き明かされることはできません。これまでにマチュ・ピチュよりさらにアマゾン側の発掘も行われており、もしかするとジャンケルのなかにまだ見ぬ都が眠っているかも知れませんが、それもまた神のみぞ知るところです。

マチュ・ピチュにはその中心として四方にエネルギーを飛ばしていたと考えられる「インティワタナ」をはじめ多くの見どころはありますが、私は「マ

チュ・ピチュは見に行くところではなく、感じる場所だ」と言っています。ぜひ皆さんにもマチュ・ピチュを感じていただきたい。世界一神聖な地にたたずみ、心を無にして祈りを捧げると、谷底からアンデスの風が吹き上がりてくるでしょう。そのとき心に浮かんだことがマチュ・ピチュからあなたへのメッセージです。私はこれまでに120回もマチュ・ピチュを訪れていますが、何回行つても飽きることがなく、毎回感動があります。世界で行ってみるべきところは多くあると思いますが、マチュ・ピチュは人生で二回は訪れるべき場所だと断言できます。



Machu Picchu ruins

標高2400mの断崖絶壁の上に現れるマチュ・ピチュの総面積は約326kmに及ぶ。都市遺跡部分は約5kmで、そのなかに神殿、宮殿、居住区などがある。

絶海の孤島の謎 「イースター島」

イースター島はハワイ、ニュージーランドを結ぶポリネシア・トライアングルのなかで最も南米に近いところにある島です。とはいっても南米大陸からもタヒチからも約4000キロ離れた絶海の孤島です。この孤独な島に人間がやってきて、隔絶した社会のなかで特異な発展を遂げました。およそ1000年の間、外の世界とつながりをもたないとどうなるのか。人間の資質、能力、多様性といったものを感じさせて非常にドラマティックな例がイースター島だと思っています。奇跡の島ですね。ほとんど孤島なので、噂には聞いている、伝説として聞いていますけど誰も見たことがないといった、沖縄のニライカナイ（理想郷）のような存在、とう島であつたと思います。

1722年にオランダ人の船長がこの島を発見しましたが、その日が「復活祭（イースター）」であったので、そのまま島の名にしたそうです。現地では、「大きな島」を意味する「ラパヌイ」と呼ばれていました。イースター島といえばモアイ像ですが、最初の発見から50年後に訪れたとき、部族間の争いで守り神のモアイはほとんど倒されてしまいました。

今私たちが目に見るモアイは、倒れていたものを立て直したもののです。モアイには元々目がありましたでしたが、目にはマナ（靈力）が宿っているとされるため、争いの際にその力を發揮できないよううつ伏せに倒して目を碎きました。



「ラノ・ララク」はモアイの製造工場。この場所で採石された火山岩は加工しやすく運搬途中だったらしいモアイも多く残っている。正座しているモアイ像が一体だけという不思議。

イースター島は荒涼とした土地が広がっています。これはモアイ像造りのための森林伐採によるものと考えられています。それがまた自然破壊を引き起こし、争いの原因になつたといわれていますが、森林はネズミに食べ尽くされたという説もあります。皆さんはどうちらを信じますか。

モアイの製造場所として知られる「ラノ・ララク」に、一体の「正座するモアイ像」があります。一番古く見えるモアイ像が座つているのに、ほかのモアイはすべて立像になつていて、不思議です。その謎は誰にも合理的な説明はできません。不思議といえば「アフ・ビナブ」のモアイの土台は実に精緻で、

きいていてマチュピチュの石像のようです。イースター島の文明の由来は南米にあるという説は、どうの昔に学術的に否定されているのですが、私自身はどうも否定しきれない部分があります。そうしたさまざまな想像をふくらませていくのも楽しいものです。

そして私からは、これから乗船を予定されている方、久しぶりに乗船を考えている方々へ「言お伝えたいと思います。それは、「世界を自分の目で見よう!」ということです。テレビでもインターネットでも世界の情報を得ることができますが、実際に目にして触れる体験は、それとはまったく異なるもので



Easter Island

15体のモアイ像が並ぶアフトンガリキ(石の祭壇)。日本のクレーン会社によって、倒されていたものが立て直された。



1:イースター島は夕日が美しく、そこに併むモアイ像の姿を見ていると時間を忘れてしまう。2:「プカオ（帽子）をかぶっているモアイはとても珍しい。3:島の南西に位置する火山「ラノ・カウ」。水深4~11mの巨大な火山湖は島の貴重な水源になる。



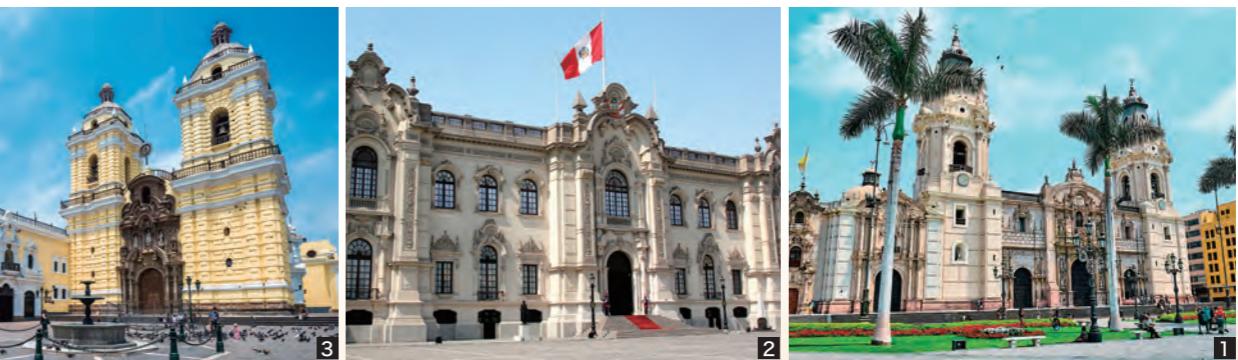
帝国が育んだペルーの美食



太古の昔、アフリカで生まれた人類がグレートジャーニーによって世界中に拡散しベーリング海峡を渡って北米、中米、南米へと辿り着いたのはおよそ2万年前であると言われています。そのなかで人類が農耕を始めて定住し、文明が育まれました。その最たるもの一つは中南米のマヤ文明であり、もう一つがペルーのアンデス文明です。

ペルーで人類の定住が始まったのは紀元前3000年頃だと言われていて、変化に富んだ自然環境を利用して、ながら個性豊かな文化を花開かせていました。

ピースボートクルーズで寄港するペルーのリマは、スペインが中南米の植民地化を通して、南米の中心地としてペルー副王領を設けました。そのためリマの旧市街には教会や大統領府（旧副王庁）をはじめ歴史的な建造物が集中し、他のエリアよりも濃密な街づくりがなされています。世界遺産にもなっているのでぜひゆっくりと散策してみてください。



1:旧市街地の中心地である「マヨール広場」は周囲にイベリア洋式の建物があり、そのなかに南米最古の「リマ大聖堂」がある。2:かつてのゴビエルノ宮殿がペルーの大統領官邸として使われている。3:2つの鐘楼とバロック洋式を取り入れた優雅な装飾の外観が特徴の「サンフランシスコ教会」。



Lima, Peru

リマはスペインの植民地の拠点として栄えたためヨーロッパ調の美しい建物が並ぶ。



ペルー風ローストチキン「ポヨアラブラサ」。街中のいたるところで食べられる。



インカ帝国時代から食べられていたとされる生の魚介類を使う「セビーチエ」。

マッシュポテトに具材を加える「カウサ」は家庭料理の定番。

Peru Gourmet

私は長くリマに住んでいますが、観光で訪れる方にお勧めしたいのはペルメです。世界屈指の美食の国であるペルーは、ほかの南米の国と比べてバラエティ豊かな食事が魅力です。牛肉やワインも他国と同様に美味しいけれど、特にお勧めは海産物です。魚介類のマリネのセビーチエは地元産のレモンとのハーモニーが最高です。貝類やカワエビなどもぜひ楽しんでほしいです。またジャガイモの原産地ですから、種類が3000以上あつてこれも美味しいし、トウモロコシもお勧め。素材そのものが素晴らしいのでどんな食べ方でも

抜群です。キヌアや野菜のスープもいいですね。もう一つ、ポヨアラブラサというローストチキンもお忘れなく。これは絶対に食べるべきペルーの名物です。なぜペルーが美食の国と言われる、食べ物のバラエティが富んでいるかといふと、冒頭に述べたように偉大な文明があつたからです。文明が豊かな食事を創造したのです。王宮があつた、帝国有があり、それが民衆へと広がつていつた。世界中どこを見てもそうです。皆さんもぜひ、ペルーに行つたらまずはグルメを満喫してください。✿



レセプション
Reception

ホテルでいうフロントの役割を果たすのがレセプション。船内のお困りごと全般に対応する。ちなみに船内イベントについては7階のピースポートセンターで情報を入手できる。



ショップ
Shop

「手ぶらで乗船しても楽しめる世界一周」がコンセプトで、1500点以上のアイテムを揃えている。手帳や文房具、日用品から各種ドリンク、お菓子に衣料品やスーツケースなどのほかお土産まで。ピースポートオリジナルグッズも人気。



安心の医療スタッフ

身体に不安な点がある場合は、診療室へ。医師看護師が同乗しており、健康面のサポートをする。



ピアノ演奏
Live piano

専属のピアニストによる演奏が定期的に行われている。朝、アトリウムでピアノ演奏を聴いてゆっくり過ごしたり、各階の雰囲気の異なるバーで耳を傾けるのも心地よい。

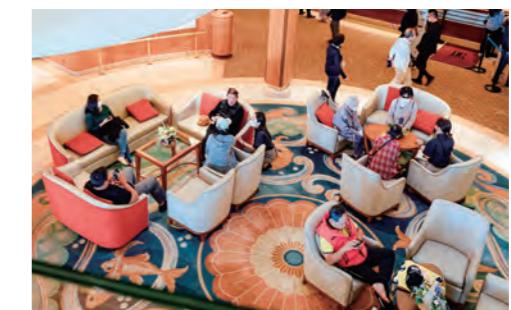


アトリウム
Pacific World



パシフィック・ワールド号で 心満たされる世界一周を

4月7日、ピースポートクルーズが3年ぶりに横浜港から出航した。それは新チャーター船パシフィック・ワールド号のデビューでもあった。総トン数77,441トン、全長261.3メートル。日本発着の世界一周クルーズ客船で最大の規模を誇り、船内スペースの広さと多種多様な施設とサービスがクルーズをいっそう快適かつ楽しいものにしてくれる。寄港地で素晴らしい体験をすることはもちろんだが、船内生活がいかに充実したものであるかが、クルーズの満足度を高めてくれる。「すべてにおいてハイグレード」と評価されるパシフィック・ワールド号の各種施設の魅力や船内生活の楽しみ方などを紹介する。



PACIFIC WORLD



新しい趣味を見つけたり 新しい習慣を身につけたり

ピースポートクルーズで人気のあるプログラムの一つがカルチャースクール。外国語講座や水彩画など文化系のものから社交ダンス、ヨガ、ノルディックウォーキングなど身体を動かせるものまで幅広いジャンルが用意されている。それぞれ専任講師が指導にあたり、初心者でも安心して楽しめる。「いつかトライしたかった」と、新しい趣味を始める人も多い。もちろん船内生活での楽しみ方は人それぞれ。公共スペースに整えられたスポーツ施設や娯楽施設を使って自由な時間を満喫したい。

朝の体操
Stretching

日の出とともに始まる太極拳やウォーキングと並んで人気なのがラジオ体操。朝日を眺めながら、最高の一日の始まり。

フィットネスセンター
Fitness center

海を眺めながらランニングマシンで走るひとときは気分爽快。スポーツジムの設備一式が整った環境を自由に利用できる。

ウォーキング
Walking

12階、14階、7階の一部とウォーキングスペースが多く、その日の気分によって場所を変えて楽しめる。ノルディックウォーキングも人気。

スポーツコート
Sports court

15階にあるスポーツコートは波音を聞きながらサッカーやバスケを楽しめる。ネットが張られているので安心してプレーできる。

卓球、麻雀、ビリヤードは気の合う仲間で楽しんだり、時には大会が開かれることもある。

バンドの生演奏でダンスも楽しめるバー。生ビールやカクテルを楽しめるスポーツバー、ピアノの生演奏をバックに静かにお酒を楽しむラウンジなど、コンセプトの異なるバーがいくつもあり、好みに合わせた大人の時間を堪能できる。

ラウンジ&バー
Lounges/Bars

映画やショーを楽しみ イベントに参加する

船内生活ではさまざまなエンターテイメントを楽しむことができる。7階にある約500人を収容できるプリンセシアターでは日替わりで映画を上映。ゆったり座れるシートは後方でも視野が確保され、座り心地も見やすさも抜群。シアターで毎日の鑑賞を楽しみにしている人もいる。上映プログラムは船内新聞を要チェック。ビストラウンジでは水先案内人の講演ほか参加者を募ってのファッションショーやのど自慢大会、船内挙げて盛り上がる季節の催し物などがおこなわれる。また多彩なゲストによる数々のパフォーマンスも人気。

講演会
Lectures

ジャーナリストや文化人、各界で活躍されている水先案内人がさまざまなテーマで講演会を開くので、貴重な知見を得る機会になる。またビストラウンジでは寄港地に関する説明会なども開催される。

パフォーマンス
Performances

世界各地からゲストを招いて、音楽、舞踊、トークなどのパフォーマンステージが繰り広げられる。

プリンセシアター

2階層分を使用しているため傾斜が確保され、どの席でも大型スクリーンを快適に鑑賞できる。映画は日・英・中国語など多言語で上映される(字幕付き)。

JAPAN GRACE 12

13 JAPAN GRACE

食を満喫する場所も種類も いっそう充実

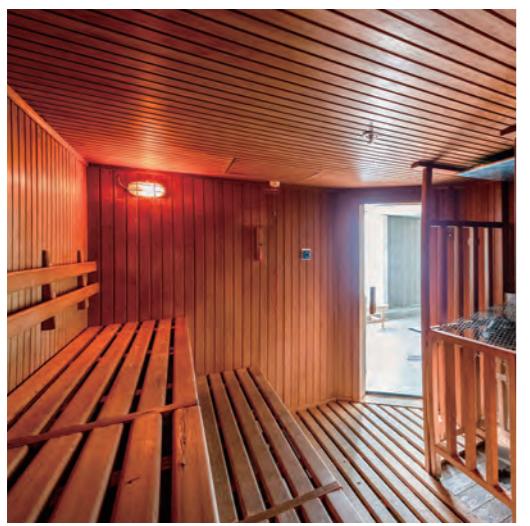
長いクルーズにおいて楽しみの一つは食事。新チャーター船パシフィック・ワールド号では、食事をとる場所もメニューもいっそう充実し、毎日、好みや気分に応じて、変化に富んださまざまなグルメを堪能できる。レストランでのコースディナー、好きなものを選べるビュッフェをはじめ海風を感じながら楽しむテラスグリルなど、100日間の世界一周のあいだ、毎日舌づみを打ってほしい。



寛ぎ Relax time PACIFIC WORLD

思い思いの ひとときを過ごす

パシフィック・ワールド号は歴代船と比べて規模が大きいため、船内にはフリースペースをはじめ、これまで以上にゆったり過ごせる場所が多くある。イベントやカルチャースクールへの参加だけでなく、一人で楽しむ時間があることは貴重だ。たとえば毎朝設けられる楽器練習広場では、リコーダーやギターを練習している人の姿がある。陽光を浴びながらプールで泳いだり、サウナやジャグジーでリラックスするのも格別だ。長編小説の読破に挑戦するのもいい。喧噪から離れた船上で過ごすゆるやかな時間はこのうえなく贅沢だ。



サウナ
Sauna

日本でも大人気のサウナが、船上でも楽しめる。スポーツ後や、寄港地での小旅行後など、心と体を整える時間に活用したい。



ビューティサロンではカットやカラー以外にも、ヘッドスパなどのメニューがある。船内バー、ティーハウスなどの前のヘアセットの人気。



プールは2つ、ジャグジーは3つあり日中に利用できる。洋上で最高のリラックスタイムを味わえる。

マキスダイニング Dining restaurant

ダイニングレストランでは朝食は和御膳、ディナーは洋食のコース料理を楽しめる。前菜、スープは3種類ほど、メインは10種類ほどから選んで組み合わせる。もちろんデザートもお好みのものを。グレードの高い豪華なディナーはまさにクルーズの醍醐味。



ホライゾンコート Horizon Court

ビュッフェ形式のレストランで朝5時から夜24時までオープン。カレー、パスタ、中華、沖縄料理、お茶漬など世界の食を楽しめる。



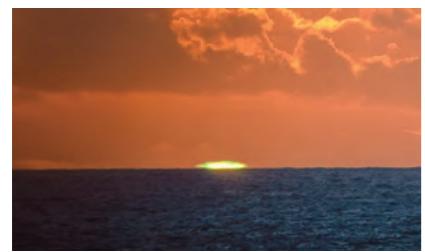
居酒屋「波へい」 Izakaya Nami Hey

洋上居酒屋。和食メニューのほか、寄港地で名産や旬の食材を仕入れて提供する特別メニューも人気。



すし処「海」 KAI Seafood Bar

本格的なお寿司を楽しめる「すし処 海」。海外からの乗客にも好評で、ランチタイムには数量限定の海鮮丼ランチが登場し、夜は予約制の寿司バーになる(有料)。



1:14階にある「ムービーズ アンダー ザ スターズ」は開放感あふれる空間。320インチの巨大LEDスクリーンを備え、定期的に「星空シネマ」が上映される。2:パシフィック・ワールド号での初出航となるピースボートVoyage114において航行したノルウェー領スヴァールバル諸島沖から見た「ロングイエールビーン」の自然美。3:ピースボートクルーズの見どころの一つ、「スエズ運河」をゆく。



場所や気候によって海の表情は変わる。船の進む様子も、爽快と滑っていくこともあれば吸いつくように静かに進むこともあります。その変化も面白い。

ピースボートVoyage114で金環皆既日食を見ることができました！

月で隠された太陽がリングのように見える「金環日食」と月が太陽を完全に隠す「皆既日食」の両方が一度に現れる「金環皆既日食」。今回の日食は洋上でしか見られないとされ、事前調査をし航行ルートを決めたうえで4月21日を迎えるました。デッキには人があふれ、船内放送のカウントダウンで、予測時間ぴったりに日食が始まり、太陽が隠れた瞬間には大きな歓声が上がりました。奇跡の天体ショーに皆で酔いしれることができました。



朝日や夕日の時間はデッキに多くの人の姿を見ることができる。時には海の色がオレンジやピンク色になることも。



洋上から感じる 自然の魅力と美しさ

ピースボートクルーズではデッキからの「眺め」に魅了される人も多い。水平線から昇る朝日、沈む夕日はことのほか美しい。運が良ければ、太陽が沈む直前に緑色に輝く「グリーンフラッシュ」の瞬間に立ち会えるかもしれない。海の表情も場所や気候によってまったく異なるので、デッキから眺めているだけでも飽きることはない。またフィヨルドや運河の美しさなど、その迫力を目の前で感じられるのもクルーズならではの魅力。イベントの一つとして企画される「星空観望会」は上階デッキの照明を消して実施され、ため息が出るほど美しく、煌めく星たちを観賞できる。洋上だからこそ迫ってくる、自然の神秘や偉大さを存分に堪能したい。



船上百景 [洋上夏祭り]



夏祭りでは多国籍の乗客に楽しんでもらえるさまざまな催し物が目白押し。



朝から夜まで一日中盛り上がる。



輪投げやヨーヨーすくいなど、お祭りならではのコーナーも。

歓声と笑顔に包まれる日

船内生活ではさまざまなイベントが実施されるが、屈指の盛り上がりをみせるのが「洋上夏祭り」。華やかな浴衣や甚平に着替える人も多く、祭りの雰囲気が高まる。ヨーヨーすべりや射的、輪投げなどには子どもたちも大喜び。実行委員が時間をかけて作る本格的なお化け屋敷も人気。中からは悲鳴(?)が聞こえてくるほど、たくさんのお化けが出迎えてくれる。また風船割りやかき氷早食い競争などにみんな積極的に参加して、大きな歓声がわく。3年ぶりの再開となつた、世界一周クルーズ Voyage 114では、白夜のなかでの夏祭りになり、いつもとは違う盛り上がりをみせたと報告が入つた。このほか浴衣ファッショーや和太鼓のパフォーマンスなど、一日中祭りは続く。最後は、国籍年代問わず、全員が輪になつて盆踊り。吹き抜ける心地よい風とともに、手拍子と笑い声がデッキに響き渡る。

乗船が叶つたのです。

演奏会では乗客とのセッションタイムもありました。言語や世代が異なる人同士、互いに目を見て呼吸を合わせることで一体感が生まれ、エネルギーが満ち溢れます。「やつと会えたね」「待つてたよ」そんな声が聞こえるような、心震える演奏となりました。

そんな交流を世界中で共有してきた船が先日無事に日本へ帰港しました。帰国された方々のエネルギーに触ると、インターネットがいくら発達してもリアルな体験にはかなわない、という確信が強くなりました。ピースボート地球一周の船旅 Voyage 114、おかれりなさい! (M・H)



船上に響き渡る四重奏のハーモニー。演奏するのは南米ベネズエラから乗船した若者たちです。ベネズエラは政治的にも経済的にも不安定な状態が長年続き、貧困や暴力を理由に犯罪に走る若者が多くいます。そんななか、子どもたちが無料で音楽を学べる場所をつくり、音楽活動を通して規律や調和を身につける、その経験を将来の希望につなげていくという、「エル・システム」が始まりました。ピースボートとの交流は長く、毎年日本で集めた楽器を船で届けるという活動も行っています。

異なる楽器が音色を合わせるオーケストラは、他者と心を合わせていく「協調」の精神がなければ成り立ちません。パンデミックの状況下では集まって練習することができず、オンラインでは互いの目を見て呼吸を合わせるのも困難でした。しかし最近になりやつと対面での練習が再開され、かれらがずっと待ち続けた